

作家の口福



桑の実と母

内田 麟太郎

図々^{ずうずう}しい宣伝には、その図々しさに、ときどき笑いを誘われるときがある。これもその好例かもしれない。

それでごくごく控えめに書くけれども、私の故郷・大牟田市の動物園敷地内に、絵本美術館が出来る。開館は再来年の春。名前は、まだ決まっていないうが、降矢^{ふりや}ななさんの「おれたち、ともだち！」シリーズの絵本原画が常設展示される。絵本の文は私。楽しい企画展もあれこれと構想中だ。

その絵本美術館のそばにキリン舎がある。キリンの名前は、リンちゃん。亡き母が私をキリンだと思ったのかどうか知らないが、母も私をそのように呼んでいた。「りんちゃん」。

へんな縁はまだあり、キリン舎のある丘陵には、かつて若宮病院があった。母はそこで亡くなった。父の漕^こぐ自転車で駆けつけたときは、母の顔にはすでに白い布がかけられていた。それが母の最後の記憶である。享年二十八

歳。私は六歳になったばかりだった。だから私はおふくろの味を憶^{おも}えていない。「六歳でありながら。おまえがぼんくらだからだ」といわれれば否定はできない。父も、常々、私はぼんやり者であったといっていたからだ。こは丁寧に読んで頂きたいのだが、父は「ぼんやり者だ」といったのではない。「であった」と過去形でいったのである。重要などころだろう。

そんなわけで、おふくろの味は憶え

てないが、おふくろとの味ならいくつ
がある。故郷大牟田市は、三井三池炭
鉱の町であつた。石炭は軍隊を運ぶ汽
車や船を動かす。アメリカの標的にな
り、平べったい町にされてしまった。

焼夷弾だ。空襲は予期されていたの
で、父は、妻と四歳の私を、熊本県北
部の菊池川のほとりに疎開させた。

食べものは乏しい時代である。

蛸の餌になるカワニナを、塩湯で湯
がき、爪楊枝でほじくっては食べた。
不味かつたという記憶もないが、うま
かつたという記憶もない。

開く前の茅の穂もよく食べた。これ
はほんのりとした甘みがあり、従姉妹
たちも好きだった。そんななかでも、

いちばんおいしかったのは、母と食べ
た赤紫色に熟れた桑の実だ。いま住ん
でいるご近所に、桑の木がある。六月
も終わりになると、桑の実が甘く熟れ
る。持ち主にお願いし分けて頂く。

桑の実の甘さが、口中にひろがる。
すこし酸っぱいときもあるけど、やわ
らかく口の中で崩れる実には、なんと
もやさしい甘さがある。好きなのは桑
の実が甘いからだけではいいのは、私
がよく知っている。母に会いたいのだ。
桑の実と一緒に食べた母の名は、ハ
ルノ。春の野だろう。絵本美術館の開
館も春。これを母の加護といわずして
なんであろう。

過保護じゃなくて、加保護ね。